

(金のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

風が吹く時

小五・荒木 凜子

ゆうは、夏の朝が好きだ。朝は風が弱くて、波もおだやかだ。夜にむけて、少しずつ風が強くなるのが、この島の一日だ。早起きをして、誰もいない静かな浜辺を歩くのが、ゆうの日課だ。夏休み三日目。今日はナギだ。風が止まっている。ゆうは目をつぶり、心が軽くなるのを感じる。

「最高に落ちつく」

ゆうがそっと目をあけると、見なれない男の子が、浜辺で海を見つめて立っている。誰だろう、こんな朝早くに。いつもは一人が好きなゆうだが、今日は言葉がでた。

「ねえあなたも海を見に来たの？ この時間に誰かに会うの初めて。今日は特別な日よ」

男の子はゆうを見て一瞬驚いて、また海を見つめて言った。

「本当に大変だよ。風がないなんて」

「え。私、ナギって好きよ。いいじゃない静かで。この島に大きな台風が来た時なんて、風がビュンビュン吹いて、町中ぐちゃぐちゃよ。そっとしておいてほしいわ」

男の子は、驚いた様子で言った。

「風は、神様からの贈り物なんだよ」

「えっ風が？」

「君は、風の声も聞いたことがないの？ 大切なことを教えてくれ

るだろ。世界が変わることもある」

風の声ってどこから聞こえるのかしら。ゆうは、海を見つめた。もう一度男の子の方を向くと、もう誰もいなくなっていた。

風がどうやって世界を変えるのかな、と考えているうちに、夏休みはあつという間に終わってしまった。久しぶりの学校で、みんなはしゃいでいた。ゆうは、落ちつかない。心がかき回されるようで、人と交わるのが苦手なのだ。

「おはよー」

ひととき大きな声が、教室に響く。島のもう一つの台風がやってきた、とゆうは思う。そう太はちよつと乱暴で、自分の思い通りにならないと、怒ってクラスをひっかき回す。続けて先生がやってきて、みんな席に着いた。

「おはよう。これからサンゴを学ぶぞ。この島はサンゴに囲まれている。みんな、どのくらいサンゴのこと知ってるかな。身近なものほど、意外とよくわかってないものだ」

「えー。サンゴ？ 今さら？」

誰かが叫んだ。この島は色とりどりのサンゴに囲まれ、美しい海が自慢だ。でも生まれた時から身近な私達にとって、特別ではない。

「サンゴは年々減っている。環境のせいだ。この夏も、だいぶ白化が進んでいる。みんなでサンゴを守るいい方法を、考えよう」

家へ帰った後、海へ行った。サンゴが色を失って死んでしまうの、悲しいな。やっぱり色とりどりの世界が、きれいだと思う。ゆうは耳をすませてみた。けれど、やっぱり風の声は聞こえなかった。

次の日は、サンゴを守る方法をクラスで話し合った。

「海に入るのをやめたらいいじゃん」

「え。海に入れないと島でくらせないよ」

「サンゴが元気になるもの、海に流せば？」

「逆だよ。いろいろなものを流すから、海がよごれて、サンゴがへるんだよ」

全然意見がまとまらない。ゆうは頭がクラクラする。みんなの声にあっとうされて、心がザワザワする。

「サンゴとか、どうでもよくない？」

そう太が大きな声で言う。そんなこといったら元も子もないじゃない、とゆうは思う。クラスのみんなからの反論に、そう太が言った。

「興味なさそうなヤツ、他にもいるじゃん。ゆうだって、何も言わないじゃん」

ゆうは自分の意見を言うのが苦手なだけだ。一緒にしないでほしい。けど、みんなにもそう見えるのかな、とゆうは少し不安になった。チャイムが鳴って、ひとまず終了。みんなの意見がぐるぐる回って、結局何も決まらなかった。私は、そっとしておいてほしいのよ。サンゴもきつと同じよ、とゆうは思った。

学校でのモヤモヤを落ちつかせようと、ゆうは海へむかった。男の子の言葉を思い出す。風って何を教えてくれるのかな。やっぱりゆうの耳には、何も聞こえなかった。

昨日までのおだやかな天気とはうって変わり、今日はすごい風だ。台風が来たのだ。学校も休校になった。ゴーゴーというすごい音が、窓の外から聞こえてくる。これが、風の声かな。ずいぶん激しいな、とゆうは思う。防風林のフクギの木の枝も折れて、風にまっぴている。

台風がさった後は、気持ちのいい青空が広がる。学校では昨日の台風の話でもちきりだ。

「おい、ゆう」

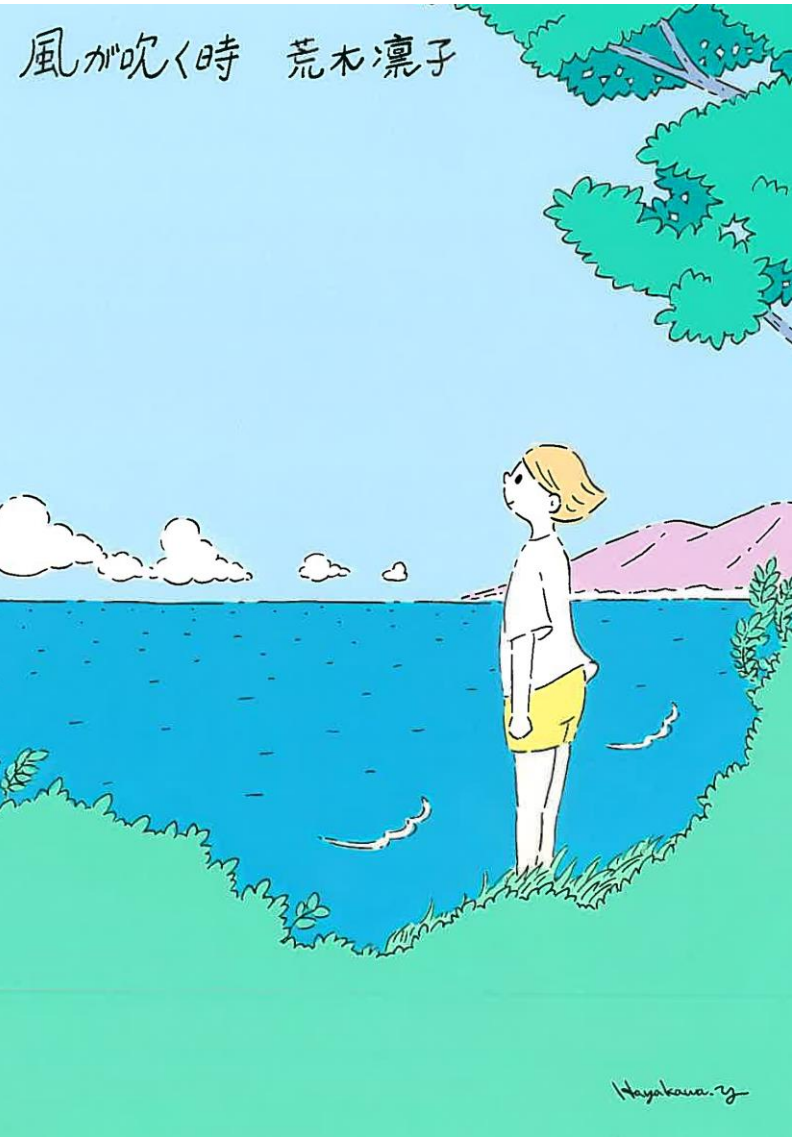
そう太に突然よばれて、ゆうはびくっとする。

「これお前のだろ。ランドセルにつけて、大切にしてたやつ。昨日の台風でさ、オレの家まで飛んできたみたいだ。庭に落ちてた」

ぶつきらぼうにそう言うと、そう太はゆうにサンゴのキーホルダーを渡してしまってしまった。小学生になる時、緊張しないで学校に通えるようにと、おばあちゃんが作ってくれたお守りだ。ゆうの宝物だったけど、なくして困っていた。私が大切にしていること、知ってたんだ。ゆうは、そっとそう太の背中を見つめた。

家に帰ると、サンゴの白化が緩やかになりそうだとニュースで聞いていた。あの激しい声のおかげ？ やっぱり神様の贈り物なの？ どうやら台風の風で海が大きくかき回され、海が混ざり合い、海水温が下がったおかげらしい。

ランドセルにサンゴのキーホルダーをつけながら、ゆうは思う。いろんな人と交わって、声を聞くのも、大切かもしれない。明日そう太にお礼を言ってみよう。風が私にも、神様からの贈り物を届けてくれたのだ。



画：早川 世詩男
